

宮本百合子選集

第二卷

百合子選集

第二卷

新日本出版社

宮本百合子選集 第二卷

1968年11月30日 初 版

1974年10月15日 第8刷

著 者 宮 本 百 合 子

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号102 東京都千代田区富士見2の13の14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (265) 7006 (営業)

(265) 2075 (編集)

振替番号 東京 13681

印刷 鎌倉印刷・製本 古賀製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

伸子	3
一太と母	305
一本の花	321
赤い貨車	361
共同耕作	411
舗道	419
注	469
解説	473
小原元	
戸台俊一	489

伸

子

一

伸子は両手を後にまわし、半分明け放した窓枠によりかかりながら室内の光景を眺めていた。

部屋の中央に長方形の大テーブルがあった。シャンデリアの明りが、そのテーブルの上に散らかっている書類——タイプライタアの紫インクがぼやけた乱暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラキラ光る何かの覚え書——の雑然とした堆積と、それらを挟んで相対し熱心に読み合せをしている二人の男とをくつきり照して、鼠色の絨毯の上へ落ちてゐる。

部屋じゅうを輝かす灯が単調であるとおりの二人の男の仕事も単調でつまらなかつた。ホームスパンの服を着た、浅黒い瘠せた男が左手に綴込を持ち、眼をくばり、頁をめくり、どんだん桁の多い数字を読みあげて行く。向い合つて、伸子の父の佐々が椅子に浅くかけ、青鉛筆を持って油断なく数字をチェックしてい

た。彼は品のよい縞の変り襟のついたスモーク・ジャケットを着けていた。くつろいだなりにも似合わず、彼はもう三十分以上その忙しい、機械的な仕事に没頭しているのであつた。

傍観している伸子には、仕事の内容も、今それをしなければならぬ必要も解つていなかった。彼女がおとなしく窓際にしりぞいて眺めているのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔はできないものと観念している習慣によるのであつた。けれども、彼女はだんだん彼らの活動の調子につりこまれて行つた。強くも弱くもならない平らかな声が早口に、

「二八七コムマ二六〇。五九三〇三コムマ四二七……」

勤勉な紡錘の唸りのようだ。それにつれ、佐々の青鉛筆はほとんど自動機的敏活さでさっさささささと、細かく几帳面に運動する。そこに自ら独特のリズムが生じた。じつと見守っていると、機械の規則正しい運転が人の心に与える、力強い確乎とした、同時に精神的な亢奮に似たものを感じるのであつた。

彼らは一息にふた綴大判の綴込をかたづけた。そして少しのろのろと、三つめの薄い覚え書を読み合せて

しまうと佐々は、いかにも重荷の下りた風で、

「やあ、どうも御苦労様でした」

と、頭を下げ椅子をずらした。

あたりには、一時に緊張の緩みが来た。伸子まで何となくほっとし、俄かに外界の騒音が自分の背後から幅広く押しよせてくるのを感じた。丁度晚餐後、人の出さかる最中だ。彼女らのいる五階の真下に横たわるプロウドウェイからは、絶間なく流れる無数の人間の蹀音、喋り声、笑い声などが溶け合い混り合い、とりとめのない雑音の濃い瓦斯体となつてのぼつて来た。夜の空まで瀾漫する都会の巨大などよめきを貰いて、キロロロロ……と自動車の警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び売する子供の「パイバア、パイバア」と云う甲高い声がとぎれとぎれ聞えて来る。——ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて、自分の黄色い手提げ鞆にしまった。そして、二言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、遽しく氣取つて出て行った。佐々は戸口までその男を見送った。戻つて来ると、彼はうまそうに葉巻の煙を吹いた。「さて——そろそろ出かけますかな」

伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に来てかけながら、訊いた。

「ほんとにいらっしやるつもり？」

「どうして？ お前も行くんだらう？ そう返事をし
てありますよ」

「私——やめたいわ」

「なぜ？」

「くたびれているの。——それに……あまり面白くも
なさそうじゃないの」

「ふむ……」

佐々は、暫く黙つて自分の吐く煙を眺めていたが、
やがて徐ろに云つた。

「着物なんぞはそのまま結構なんだからおいで。

——行けば何かしら行つただけのことはあるものだ。
それに儂のいるうちでできるだけ人も知つて置かない
と、いざという時一人で困るよ」

今夜、彼女は父と二人、日本人の学生倶楽部で催さ
れるある集り、茶話会のようなものに招かれていた。
最近故国から来た某文学博士を中心として打ちとけた
集りをするという案内を貰っていたのだが、伸子は一

向好奇心が起らなかった。彼女自身も紐育ニューヨークには新來の旅客であつた。彼女は、午後独りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ、神經を疲らせて歸つた。夜まで行儀を守つて人なかにいなければならないのは、彼女に少しうんざりなのであつた。けれども健康で活氣がある佐々は、伸子の引つ込み思案を多くの場合うけつけなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思われぬ活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滞留しているうちに、地理も覚えさせ、交友もこしらえて置いてやろうという心遣いが潜んでいるのは明かであつた。彼は会社の用事で、僅か三箇月ばかり、この都市に來た。彼が歸つてしまえば伸子は独りでいのこの予定であつた。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く処へはついて歩いた。市役所から、ある大銀行の金網の裡で、人間が金貨の山に埋まり血の氣のない指で金勘定をしている、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、これという定つた目的もない伸子は、また、それでもしなければ一日が永く、捨てられた石のように退屈したに違ひない。――

今も彼女は確かに行きたくはなかつた。けれども、

父が出たあと、ぼつたり独りでホテルの部屋に十二時頃まで閉じ籠ることを考えると、それはあまりぞつとした役廻りとも思えない。

伸子が足をふりふり愚図々々している間に、佐々はそれにかまわず活動家らしい足どりで寢室に行った。間もなく、開け放した扉から、水のばしゃばしゃいう音、髪ブラシを置く軽い乾いた音などが響いて來た。窓からは、宵っぱりな都会の眠氣知らずなざわめきと、向い側の建物の屋根の頂に廻っている広告イルミネーションの氣ぜわしい明滅。下界の燈火を反射して、ぼうつと潤いを帯びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり、

「おいてきぼりにされては大変だ！」と云う、子供らしい切ない思いがこみ上げてきた。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追つた。佐々はもう髪の手入れもすみ、部屋の真中に立つて上着に片手を通してかかっているところであつた。それを見ると彼女は慌てて云つた。

「すまないけれど一寸待つて下さらない？ 私、やはり行くわ」

伸子は足早に鏡の前に行った。

佐々は、時計をみた。

「もうあまりゆっくりはできないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髪をなおし、小さなまるい茶色の帽子をかぶった。

二

丁目がふえるにつれ、人通りが減り、街がさびれてきた。

父娘は、陰気にブラインドのおりた大きな飾窓ショーウィンドウについて角を左へ曲った。表通りから入ると俄かに暗く、緩く爪先下りになった舗道の足許さえよくは見えないようであった。行手の大通り一つ隔てた彼方がハドソン河で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。リヴァーサイド・パークの葉のない樹木の間に冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯っているのが見える。

伸子は、寒さと淋しいところへ紛れこんだ気味悪さとで異様な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父親

の腕にすがりついた。

「——まるで暗いのね。——見当がおつきになって？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩きながら、絶えず右側の家並に注意を払い、幾分平生と違う圧えつけた音声で答えた。

「もう少し先だろう。——然し、こうどれも同じ形の家ばかりではまいるな。もっと街燈でもふやせばいいのに……」

全く、左右には低い鉄柵と三四段の上り口を持った狭い家の入口が、どれもこれも同じ型で幾十となく並んでいた。舗道のまばらな街燈の光は、一寸奥へ引込んだんだそれらの質素な戸口まで届かない。彼らは、だんだん侘しく感じながら、ほとんど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになった時分、彼らの前に一つ明るく灯かげの洩れる弓形窓が現れた。カーテンの隙から、内部にちらつく男の立姿や文句の判らない話声が聞えて来る。——

伸子は、父の腕を引いた。

「ここよ！」

佐々は、外廻りを一通り眺め、入口の段を昇った。

呼鈴を押した。短い、余韻のない音が直ぐ、扉の彼方で鳴った。伸子は期待と好奇心を感じた。暗い横通りで変な不安に襲われて来たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子の、はまった扉の一重彼方が何かの暖かさ楽しさを持っていてそうに思われたのであった。すぐ硝子に人影がさした。輕扉は内側に案外滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼らを見ると更に入口を広くあげ、改った口調で挨拶した。

「よくいらっしゃって下さいました。——どうぞ……」

佐々は玄關の間に入るとすぐ外套を脱ぎはじめた。

伸子は自分の周囲を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があった。左側には、葡萄葉の厚肉浮彫のあるベンチが置かれ、その前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奥に重いカーテンで人目を遮った開け放しの室があった。その広間から男声ばかりの、圧力が籠った談笑が響いて来た。その辺一帶頑丈な茶色の檜の円柱や鏡板がつやつやと灯の下で光っているのが、伸子に快適な感銘を与えた。彼女の感覚に新鮮な一種の匂いとその辺に滲みついていて。家具の艶出液つやだせのにおい、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のもの

のから立つようなにおいが皆一つに溶けこんだ、男ばかりの住居らしい匂いだ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云った。

「——ではこちらへ、女の方も沢山来ておられますから……」

伸子は軽く頭を下げる拍子にはじめてその男の顔をはっきり見た。彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着ていた。陰気な顔だが、円みのある大きい顎あごが目についた。伸子は、階段を登りながら、

「安川さん、来ていらっしゃいますか」と訊いた。

三十五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答えた。

「来ておられます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いていて中から女の喋り声がした。彼は、

「安川さん」

と声をかけた。

「佐々さんが見えました」

中の話声がびたりとしずまった。

「まあ！　そうですか」

声とともにやや前^{まへ}踏み到大股で、闊^いの上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去った。安川冬子は、伸子がある専門学校に僅の間籍を置いていた時、上級の学生であった。彼女は勤勉な学業の優れた生徒として誰にでも知られていた。伸子は、一二度口を利いたくらいの間であったが、ここでとにかく海の彼方からの友達と云えるのは彼女きりであった。安川は、一年ばかり前からC大学で教育心理学を専攻しているのであった。

安川は、珍しそうにじろじろ伸子を見た。

「噂はきいていたけれど、私は一向外へ出ないから、ちっとも知らなかったわ。よくいらしてね。——いつこちらへ着いて？」

「三週間ばかり前」

安川は、学校時代とちっとも変らない、その変らないに伸子が驚いたほど同じてきばきした口調で訊いた。

「お父様と御一緒だって？」

「ええ。腰巾着^{こしきんちゃく}」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱いなのを感じた。

「今夜も下に来ているわ」

「そう。——いいわね。今どこ？　お宿は」

「ブレントホテル」

「ああ、私あすこならいつだったか行ったことがありますよ。——皆さんにご紹介しましょうね、こちらは高崎さん——高師をおでになって家政学をやっている。この方は名取さん——音楽がご専門——」

伸子は一人一人に向って克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い応答が終ると、伸子は失望というか、意外さというか、ぼんやり寥^{さび}しい心持を感じた。居合せる人の中には一目で何処か好きになれるというような人が一人もいなかった。彼女らは、それぞれ専門もちがいが容貌も違っているのだが、誰でもがしっかりものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追い立てられているという余裕のない感じ。それらは、うるおいのない身なりとともに、例外な

い持前であつた。伸子は、傍の椅子の上に外套を脱いだ。

一旦途切れていた学校の話、留学生の噂が間もなく甦つた。ある人は、伸子に親切に話しかけた。彼女は愛想よくそれぞれ答えた。然し、心が変に沈鬱になつた。伸子は、この部屋をこめてゐる生活の狭い、暢々しない雰囲気為何となく窮屈で馴染めなかつた。折角新しい自然や人間の生活の中に入ってきていながら、何も見ず聞かず、友達によつても課業、課題、いそがしさ、又は、第三者には興味の起しようもない噂しかできない海外遊学生境遇に、伸子は恐怖を感じた。縛りつけられた感じは、階下の広間に出ても伸子から去らなかつた。

広間の隅では佐々が機嫌よく安樂椅子に納まり、しきりに何か喋っている。

入口に近いカーテンの傍の柱によりかかり、腕を組み、先刻彼女を二階まで案内した男が、もう一人の椅子にかけた男と話していた。椅子にかけてゐる男の膝には、場所柄になく白と黒との斑猫が一匹丸くなつて抱かれていた。この男は打ち寛いだ風で、その猫の背

を撫で撫で物を云っている。家庭的な光景で、彼女はいい心持がした。伸子は、隣りに坐つてゐる中西という、おそく来た、美しい、情の籠った声で物を云うひとに、その男の名を訊こうとした。

すると、先刻の男が大柄な骨っぽい体をぎこちなく運んできて彼女のじき前にあるテーブルの横に立つた。彼は、テーブルの端で埃でも払うような手付をする、低い声で、

「今晚は——」

と開会の辞めいた挨拶をしはじめた。囲りの幾つかの顔が声の方へ振り向いた。広間じゅうのざわめきがしずまった。森とした寄木の床の上で誰かが椅子をずらせた。——改った咳払いの音がする。……

男は、伏目になつたまま、平凡に多数の人々の集つたことに対する満足の意をのべ、松田博士の歓迎の言葉と紹介とを終つて席についた。松田博士は、懇篤そうな中老年人であつた。彼は自席に立つて、座談的に芸術の郷土的特質という見地から、亜米利加の絵画について、の観察を話した。

話しては、やや囁がれた平坦な音声で、常識的に話

を進めて行く。伸子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覚えてきた。彼女は、話をききながら、向い側に並んでいる男達の顔を見較べはじめた。大概の男は広間の右側に立っている博士の方に頭を振っているの、伸子のところからは沢山の顔の左半面だけが見えた。艶々した血色の上瞼の脹れぼったい凡俗な顔、皮膚が黒ずんで目鼻立の粗い、恐らくは口中が臭そうな容貌、又は、頬から口の辺にかけて肉の薄い、粘液質らしいすべすべした皮膚の持ち主。——ちよつとした脚の置き方や、椅子のもたれ方がみな何処か隠れた性格の一部を現しているようで、伸子はこの見ものを面白く感じた。正面から視た時は、伶俐そうに引緊っていたある青年の顔が側面から見るとまるで魯鈍さを暴露し力弱く見えた。——伸子はふと平生あまり見たことのない自分の横顔について微かな不安を感じた。順順にわたって、彼女と斜向いになっているさっきの男、名も仕事も知らない中年の男の番が来た。

彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、癖と見えてしっぺ胸のところへ腕組みをして、うつむき加減になっている。先方から見られる心配ない一瞥を与えな

がら、伸子は微かな戸惑いを心の隅に感じた。彼の横顔には、これまで見てきたどの男達にもない何かがあった。ほかのどの男でも、容貌と軀とは同じ力の密度——つまり胸のところにありと同一血や肉でひとくるみにできていると感じられるのに、この男ばかりは肩幅のひろい北国人風な体つきと、その上にのっている顔との間に、妙にちぐはぐなものがあつた。足許から同じ力を入れてずつと見上げていくと顔へ来て急に視線が間誤つくような複雑なもの——地味さ、感傷的なもの、心持がのびやかに外部に発しきらず内攻しているという印象を与えるものなどが、陰翳となつて、下唇の引緊つた蒼白い横顔にはびこっているのであつた。

伸子の視線は一二度後戻りをした。彼女の好奇心が、その陰気な横顔にむかつて動いた。彼の顔にあるものは、決して多くの人々の持っているような得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもなかった。何か陰のものであつた。それは暗さに近い。視るたびに、その陰翳は何処から来る何物なのかをひどく知りたい心持を起させる種類のものののだ。

松田博士の話は終った。

あたりには以前より打ちとけた談笑が起った。廊下の方の扉が開き、アイスクリームや砂糖菓子が運びこまれた。すると、伸子が好奇心を持った男が再び立った。そして新しい顔ぶれもあるから、順ぐりに自己紹介をしたらと思うがと提議した。そういうことの大嫌いな伸子は、思わず救いを求めるように遠方の父親を見た。父はその申し出がさも愉快そうに、愛嬌のよい微笑を眼尻の襷ひだりにたたんで晴れ晴れと坐っている。

「それでは——請う随しかたより始めよということがございますから、失礼して私から申し上げます」

彼は、佃一郎という姓名であつた。C大学で比較言語学を専攻し、古代の印度、イラニアン語をやっているのだそうだ。国は裏日本で、研究の傍、Y・M・C・Aの仕事を手伝っていた。彼は、

「私でできますことはできるだけ御相談にあずかりますから、どうぞ御遠慮なくおっしゃって下さい」と結んだ。

古代語の研究と、極めて実利的なY・M・C・Aの仕事との間に、どんな心持の上の必然なつながりがある

のだろう。伸子は瞬に落ちない気がした。が、彼の専門の題目は漠然とした満足を彼女に与えた。彼の顔に現れているものとその研究との間に性格的な関係をもつ何ものかを感じたように思つたのであつた。

後から立った者は、ほとんど皆、政治、経済、社会学、法律等が専攻であつた。猫を抱いていたのは、沢田という植物学を勉強している人であつた。女達も、各々抱負や目的を手短かに述べた。伸子は極りわるさからぶっきら棒にただ、「佐々伸子と申します。——よろしく」と云つただけで坐つた。彼女はこれらの人々を前に置いて、自分は広い深い人間の生活を知りたいのだ、死ぬまでに一つでも、よい小説が書きたいのだ、と告白する勇氣をととも持ち得なかつたのであつた。

親娘は、十二時少し前にホテルに帰つた。

伸子が湯上りの部屋着で、昼間買つて来た細工のよい銀製の封蠟道具をいじくっていると——それは欧州戦争の第五年目で、毎日処々に赤十字や戦地慰問のためのバザーがあつた。伸子はその一箇処で、古風なその道具を見つけてきたのであつた。——寝衣に更えた佐々が来て、

「明日の朝九時に佃君が来るから覚えていておくれ」と云った。

「佃さんて——今夜の？」

「うむ。——頼まれて来た南波の甥のことがどうも気になるがとでも一人でやっていられないから、あの人にもちと手伝って貰おうと思ってるね」

佐々は、大まかに云った。

「あの男はこちらに大分永いらしいから、きっと何か手がかりを見つけてくれるだろう。案外、いやその人なら知っているというようなことがないでもあるまゝ……こんなに人間のうじゃうじゃいるところで、何年も行方不明の男一人見つけようとするのは、何しろ一仕事だ！」

そして、

「早くお前もおやすみ」

彼はいかに活動の後の睡眠を愉しむ風でさっさと寝台に入った。

三

次の朝、伸子はいつもの通り元気を恢復し、爽やかな気分で見覚めた。寢室のカーテンはまだ閉じたままであった。カーテンの僅かな隙間から、一本の震える細い金線のような光線が薄暗い部屋に射しこみ、化粧台の上の白粉壺に小さい燃える炬火のような閃きをつくっている。

彼女は、静かな気持でかけものをはねのけて起き上った。伸子は、首をのびし、彼方の寢床を眺めた。父は先に起きてしまったと見え、床は空であった。

伸子は、枕許の時計を見た。九時半になっている。

彼女は、忽ち昨夜の約束を思い出した。

彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天気だ。少し靄っぽい空で、朝日が暖かく十月下旬の街路や建物に輝いている。伸子は、格別急ぎもせず顔を洗い、髪を結い、衣服を更えた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアのついたさっぱりした紺の服で広間へ下りて行った。